

## 書評

土居健郎 著

## 臨床精神医学の方法

衣笠隆幸

土居先生は、精神分析と精神医学の大先輩であり大家である。私が精神科に入局した頃から、先生のご著書「精神分析と精神病理」,「甘えの構造」などを一所懸命読んで、最終的に私自身も精神分析家になる道を選んだのである。今回編集部より土居先生のこの著書の批評の依頼があった時には、大変名誉なことだと感じ、他方では自分には荷が重すぎるのではないかとずいぶん躊躇した。実は土居先生が、私たちが主催している日本精神分析的精神医学会の第三回大会(2005 年)の特別講演をお引き受けくださったことがあった。そして、その講演を基調にした論文が本著書の第 11 章に掲載されていることを知って、この書評をお引き受けしないといけないと思うようになった。その時の先生のご講演は、大変感銘を受けるものであった。そこには先生が常日頃主張してこられた、臨床体験を真摯に正直に見ていくことの重要性を実践されている姿があった。

この著書は比較的小冊であるが、その中に書かれているものは、土居先生の長年考えてこられたものを基にした大変含蓄のあるものである。ここで取り上げられている主題は、先生が「序」の中で述べておられるように、臨床精神医学における精神分析の実践の本質的問題である。日常語と専門語と精神医学(第 3 章)、臨床精神医学の方法論(第 12 章)など精神科臨床に関する原則的な主題に関しては、私たちの専門家としての根源的な視点を問われるものである。

土居先生の驚くべき姿勢は、深い洞察力によって、それをすべて自分の本当に納得のいく血

の通った日常語で明らかにしようとしていることである。多くの章は、土居先生の集大成のお考えを述べておられるが、それらについて先生が精神科医、精神分析家として一生貫いてこられた姿勢や、自分の腑に落ちる真の言葉を追及してこられたことに驚きを覚えるのである。そしてそのすごさは、精神医学や精神分析の臨床の世界を、日本語を通して世界的な普遍さを獲得していくことが自分の務めだと明言され、それを現在まで貫いてこられたことである。周知のように、甘え理論は、精神分析や社会文化論の分野において世界的に高い評価を受けて、それが日本だけのローカルな問題ではなく、地球規模の人類に普遍的に共通した重要な基礎的関係性をとらえた言葉であることが認められている。これこそが、土居先生が目指してきたものの大きな成果の 1 つであろう。

この著書の一部には、精神分析の専門的な概念に対する土居先生の苦心の考察に関するものも掲載されている。そこでは、特に甘えに関する研究と解説や、精神分析における重要な専門用語であるナルシズムとの関係、対象関係、アイデンティティとアイデンティフィケーションなどに関して、その真の意味を平易な日常の日本語でどのように表現するべきかなどの深い考察が行われている。そして、先生の臨床活動についての深い洞察と専門用語の広汎な知識と咀嚼が基礎になっており、逆説的に先生のきわめて複雑な思考過程を垣間見ることができる。

(広島市精神保健福祉センター)

●四六判 200 頁 2009 定価 2,625 円(本体 2,500 円+税) 岩崎学術出版社